

「
冬
の
ひ
と
」

○梗概

北海道に住むマタギ・大楠 清（50）の暮らしに派手さは無縁だ。朝起きると、死んだ娘の仏壇に水を供え、自家製の鹿肉ベークンで朝食を作り、食後に新聞片手にブラック珈琲を飲む。これが毎朝の決まりだ。

午前中に山に入り、ヒグマの痕跡を追う。ヒグマと遭遇しても、決して仕留めることはない。ここ20年、彼はヒグマを撃っていない。そんな大楠を一部の同僚はマタギとは呼べないと馬鹿にする。

近所の畑を荒らすエゾシカを駆除し、仕留めた獲物は食料として貰い受ける。謝礼に農家から野菜を貰うこともある。それに行きつけの小料理屋の女将・深雪（43）が娘の緒音（16）に食べ物を持たせ届けてくれるので食べるのに特段困ることはない。

行動範囲も決まっている。山以外は温泉施設で汗を流すか、スクーターで少し離れた商店に買い出しに出るか、呑みに深雪の店に行

くぐらいた。もうそんな生活が長い。

自分に良くしてくれる深雪が好きだし、深雪も自分に気があることは知っている。緒音だって慕ってくれている。だが、自分には家庭を持つ資格がないと大楠は思う。

最愛の娘（4）が山のヌシである巨大熊・ゴロに食い殺された日から大楠の人生は一転した。妻とも別れ、ゴロに復讐する為だけに今まで生きてきた。他のヒグマに興味はない。ゴロをやれるなら命も惜しくない。そんな大楠を嘲笑うようにゴロは20年間姿を見せず、その間やり切れなさだけが募る。

遂にゴロが姿を現す。緒音に涙ながらに「必ず戻ってきてくれ」と懇願され、大楠は戻ると約束し、ゴロを追って山へ入っていく。「ショウブ、ショウブ（獲物を仕留めた時の掛け声）」と大楠の声が山林にこだまする。ゴロとの死闘を制し、ようやく大楠は次に進む決心をするのであった。

○登場人物

大楠 清（50）（30）マタギ
加我緒音（おと）（16）女子高生
加我深雪（43）緒音の母親
木俣勇作（38）同僚のマタギ
小田部 繁（68）同僚のマタギ
俵 金造（81）大楠のマタギの師
ジャガイモ農家（70）
氷橋（すがばし）（35）商店店主
畔木（くろき）（63）酪農家
女兒（4）
男性外国人1 旅行者
男性外国人2・3 旅行者
時計店店主（60）
近隣女性（48）

○北海道・山道

T・北海道

雪景色が広がる。

ハンティングウェア姿の大楠 清（30）

雪を被る山道脇に佇む地藏菩薩に手を合

わせ、

大楠「アブラウンケンソワカ」

俵 金造（81）、山道脇に腰を下ろし、

握り飯を食べながら大楠を見る。

俵、指を舐めとり、

俵「さあ、行くべ」

と、立ち上がり歩き出す。

大楠、猟銃を肩に背負い、俵の後を追う。

○雪山・全景

白く覆われた山肌。

○同・雪原

大楠、体長2・7メートルはあるヒグマ

（ゴロ）を目の前に立ち竦む。

大楠の背後で猟銃を構える俵。

俵「大楠！」

大楠「（我に返り）よ、よくも千紗子を。殺してやる」

大楠、猟銃を構える。

ゴロ、ゆつくりと大楠に体を向ける。

大楠「来やがれ、バケモノ！」

が、手が震え、ボルトハンドルを引き損ねる。

ゴロ、大楠に飛び掛かる。

大楠「く、くそっ！」

と、その場に身をかがめる。

山林に乾いた発砲音が響き渡る。

樹々から一斉に鳥が飛び立っていく。

ゴロ、右目を撃たれ、雪原をのたうつ。

俵の銃口から一条の硝煙が立ち昇り、

俵「ちっ、外したわい」

ゴロ、逃げるように藪の中へ姿を消す。

大楠、逃げていくゴロを呆然と見送る。

○大楠宅・寝室（夜）

薄暗い室内。

T・20年後

仏壇に千紗子（4）の遺影が飾られている。

布団の中で目を開け、天井の節穴を見つめる大楠（50）。

大楠の顔は髭で覆われている。

大楠の右目から一筋の涙が流れ落ちる。

○同・台所（夜）

寝間着姿の大楠、蛇口からコップに水を注ぎ、飲む。

流し台には開封された錠剤のシュリンク（この時点で何の薬かは分からない）が置かれている。

○大楠宅・外観（朝）

小高い丘にポツンと建つ木造の平屋。
裏手には山に続く雑木林が広がる。

玄関先に停まるスクーター。

○同・寝室（朝）

畳まれた布団。

大楠、仏壇に水を供え、

大楠「（千紗子の遺影に）ここまでズルズル
来ちゃった」

と、リンを鳴らし、手を合わせる。

○同・台所（朝）

大楠、冷蔵庫からジップロックに入った
残り僅かの肉の塊を取り出す。

ラベルにマジックで『鹿肉ベーコン』と
手書きされている。

フライパンの上でこんがり焼ける鹿肉ベ
ーコン。

大楠、卵二個をフライパンに割り入れる。

○同・居間（朝）

食卓にベーコンエッグと焼いたトースト、

ブラックコーヒーが並ぶ。

大楠、蓋にマジックで『木苺ジャム』と
手書きされた瓶を手にとると、トースト
にたっぷりと塗り付ける。

大楠、トーストを頬張る。

× × ×

掛け時計の針は10時前を指す。

本棚はヒグマの生態に関する専門書で埋
まっている。

大楠、片付いたテーブルの前で新聞片手
にブラックコーヒーを飲む。

○山中

茂みが広がる。

大楠、屈みこみ、地面に残る獣の糞を小
枝で掻きのぞきながら、

大楠「クマだ。まだ新しい」

と、周囲を見渡す。

茂みからゴソツという物音。

大楠、猟銃を手に立ち上がる。

大楠、ゆっくりと茂みに近づく。

茂みの向こうに黒い塊が見える。

大楠、咄嗟に猟銃を構える。

一頭のヒグマが大楠を振り返る。

茂みを挟み、暫くヒグマと対峙する大楠。

ヒグマ、踵を返し、茂みの奥へ姿を消す。

大楠「違ったか」

と、猟銃を下ろす。

○同・沢

大楠、沢の水で顔を洗う。

上空から風切り音。

大楠、顔を上げると上空を一台の小型ド

ローンが滑空していく。

大楠「何だ、ありゃ？」

と、猟銃を構えるとドローンに向けて発

砲。

ドローン、操縦を失い河原へ落下。

ドローンへ駆け寄る大楠。

木俣の声「誰だ、俺のドローンを撃ち落とす

た奴は？！」

木俣勇作（38）、駆け寄って来て、壊れたドローンを拾い上げる。

木俣「あーあ、これじゃもう使いもんになんねえ。げっ、カメラまで」

木俣、大楠を振り返り、

木俣「大楠さん、あんたか？」

大楠「ああ」

木俣「10万円が……どうしてくれんだ？！」

大楠「（嘲笑気味に）まさか、そんな玩具が10万円もするわけ」

木俣、大楠を真顔で睨みつける。

大楠「本当にするのか？」

木俣「ああ」

大楠「すまなかった。それじゃあ、俺はこれで」

と、踵を返し足早に立ち去ろうとする。

木俣「あ、おい！逃げんのか！弁償してもらうからな」

と、悔しそうに地面を踏み鳴らす。

○温泉施設・洗い場

小田部 繁（68）、ナイロンタオルで
体を洗う。

小田部の背中には無数の古傷。

大楠、小田部の隣に腰を下ろす。

異常に盛り上がった大楠の背中。

小田部「よお」

大楠、頭を下げる。

小田部「今日も山に入ってたのか？」

大楠、頷き、頭を洗い出す。

小田部「熱心なこった」

と、再びナイロンタオルで体を洗い出す。

○大楠宅・台所（夜）

大楠、流し台の上で砥石を使いナガサ（
狩猟刀）を研いでいく。

研ぎ終え、指で刃先をなぞる。

大楠、ナガサを振り下ろす。

大楠 「（構え直し）ふんっ！」

と、薙ぎ払ったり、突き刺す動作を繰り返す。

○里山・全景

銃声が轟く。

○ジャガイモ畑

畑の真ん中に一頭のエゾシカが横たわる。

大楠、エゾシカに駆け寄る。

エゾシカは眉間を撃ち抜かれ、黒々した瞳を潤ませ絶命している。

ジャガイモ農家の声 「とうとうやったか？！」

と、大楠に駆け寄るジャガイモ農家

（70）。

大楠 「（エゾシカの死骸に手を合わせ）アブラウンケンソワカ」

ジャガイモ農家 「ここの農家は皆、こいつらに頭悩まされてるんだ。保護政策だなんだで、思いのほか増えすぎちゃってよ。あ

る意味、こいつも被害者だ」

大楠、エゾシカの首元にナガサを一刺し
する。

× × ×

大楠、ビニール袋に入ったエゾシカの死
骸をスクーターの荷台に括り付け、

大楠「じゃ、約束通り貰っていくぞ」

ジャガイモ農家「ホントに金はいいいのか？」

大楠「ああ、こいつで十分だ。久しぶりにご
馳走にありつける」

と、荷台のエゾシカの死骸を叩く。

ジャガイモ農家「そうか。なら、これ。せめ
てもの礼だ。ウチで採れたイモ」

と、ビニール袋一杯のジャガイモを大楠
に手渡す。

大楠「いいのか？ じゃあ、貰っとく」

と、スクーターに跨り、

大楠「じゃあ、行くわ」

と、走り去っていく。

○ジャガイモ畑を縦断する一本道

風を切り、大楠のスクーターが進む。

側道を歩くバックパッカーの外国人カッ
プルとすれ違う。

大楠「こんな田舎に不釣り合いなこつた」
と、首を傾げる。

『カー、カー』という鳴き声。

上空をカラスの群れが漂い始める。

大楠「後ろのを狙って集まってきたな」

大楠、上空を見上げ、

大楠「（大声で）やらねえぞ！ さあ、あつ
ち行け！」

大楠、加速し走り去る。

○大楠宅・裏庭

大楠、洗い場のホースを使い、エゾシカ
の死骸を丁寧に洗っていく。

大楠、ナガサを取り出し、手際よくエゾ
シカを捌き始める。

『長一郎』という表札が掛かった犬小屋

から一匹の雑種犬（長一郎）が顔を出す。
長一郎、エゾシカを解体する大楠の傍に
来て腰を下ろす。

大楠「何だ、イヌ。欲しいのか？」

長一郎、『ワン！』と鳴く。

大楠「仕方ねえな、ほれ」

と、身が付いた大腿骨を長一郎の足元に
投げてやる。

長一郎、骨に飛びつく。

大楠、再びエゾシカを解体していく。

○同・台所（夕）

大楠、鹿肉が入った鍋にワインを注ぐ。

大楠、コンロの火を点け、

大楠「よし、あとは煮えるのを待つか」

と、鍋に蓋をする。

○同・寝室（夕）

大楠、仏壇に鹿肉のワイン煮を供える。

大楠、千紗子の遺影に向かって、

大楠「今日は趣向を凝らしてエゾシカのワイン煮だ。中々いけるぞ」

と、手を合わせる。

○同・居間（夕）

ワイン煮と数種類の副菜が並ぶ食膳。

大楠、手を合わせ、

大楠「いただきます」

玄関から来客を告げる呼び鈴が鳴る。

大楠「全く、誰だ」

と、渋々立ち上がる。

○同・玄関（夕）

大楠が玄関に向かうと、ガラス戸に人影が見える。

緒音の声「清、いる？ 私、緒音」

と、戸を叩く音。

大楠「今開けるから、待ってろ」

引き戸を開けると、加我緒音（16）が立っている。

緒音「ようっ」

と、右手を顔の前に上げる。

大楠「ああ」

緒音「これ、ママが清に持って行けっ。どうせろくなもの食べてないだろうから」

と、紙袋を差し出す。

大楠「悪かったな」

と、受け取った紙袋を覗き込む。

大楠「煮物か。いつも悪いな。しかし、美味そうだな」

緒音「美味しいよ。だって小料理屋の女将が腕に撚りをかけて作ってますから。味わって食すように」

大楠「そうだな」

互いに笑い合う二人。

大楠「そうだ、ちよつと待っててくれ」

と、廊下の奥へ姿を消す。

両手にビニール袋を持って戻ってくる大楠。

大楠「これ、今日仕留めた鹿肉だ。食ってく

れ」

緒音「いいの？」

大楠「ああ、好物だろ？ あとこれ」

と、ジャガイモの入ったビニール袋を差し出す。

大楠「イモだ。農家のオヤジに山ほど貰ってよ。一人じゃ食いきれねえから」

緒音「ありがとう。それじゃあ」

大楠「送っていくぞ」

緒音「いいよ。自転車だし」

大楠「そうか、気を付けてな」

緒音「うん。バイバイ、清」

と、手を振り、自転車に跨り家の前の坂道を下っていく。

大楠「清ね」

と、首の裏を照れくさそうに搔き、引き戸を閉める。

○同・居間（夜）

大楠、猟銃の手入れをする。

携帯ラジオからニュースが流れる。

アナウンサーの声「道内においてヒグマによる民家への被害が相次いで発生しています。専門家によると、この夏の猛暑でヒグマの主食であるドングリなどの木の実が不作だったことが大きな要因ではないかというところです」

大楠、銃身を拭き終え、猟銃を構える。

○大楠宅・裏庭（朝）

大楠、腐葉土の山に手をつ突っ込み、まさぐる。

傍らに座り、様子を窺う長一郎。

大楠、腐葉土の中から一匹のミミズを引っ張り出し、鼻を近づけ匂いを嗅ぐ。

大楠「丸々と太ってて美味そうだ」

と、舌なめずりする。

長一郎、『ワン！』と鳴く。

○山中・沢

大楠、釣り竿の針に丸々と太ったミミズを突き刺し、針を沢の中へ投げ入れる。バケツの中で数十匹ものミミズが蠢いている。

ものの数秒でイワナを釣り上げる大楠。

大楠「ヘイワナを針から外しながら」やっばり店で売ってるミミズとはおいが違う。食いつきが比べ物にならない」

と、再び針を沢の中へ投げ入れる。

○大楠宅・台所（夕）

大楠、魚焼き器でイワナ4尾を焼く。塩を纏ったイワナが脂を爆ぜ焼けていく。外から長一郎の鳴き声。

○同・裏庭（夕）

イワナの身を解した混ぜご飯にがつく長一郎を傍らで見守る大楠。

大楠「イヌ、美味いか？」

長一郎、ひたすら食べ続ける。

大楠「今日は沢山釣れたからな。暫くイワナだが我慢しろ」

長一郎、食べるのを止め、雑木林に向かって歩いていく。

大楠「おい……」

長一郎、歩みを止めると、雑木林に向かって吠える。

大楠「（長一郎に駆け寄り）急にどうした？」
雑木林に向かって唸り声を上げる長一郎を怪訝な表情で見つめる大楠。

○裏の雑木林

シイタケの原木が並ぶ。

大楠、籠を背負い原木に近づく。

食い荒らされた原木が数本転がっている。

大楠、腰を下ろし、地面に残る獣の足跡（幅20センチほど）に手を触れ、

大楠「昨日、イヌのやつが吠えてたのはこれか」

と、周りを見渡す。

○山林・中腹

大楠、エゾマツの根元に屈みこみ、地面に残る幅20センチほどの足跡に触れ、

大楠「ここにも」

大楠、エゾマツの幹に出来た爪痕に目をやる。

さらに樹皮にこびり付いた獣毛を摘まみ上げ、

大楠「クマの毛……」

大楠、山林を見渡し、

大楠「ヤツに違いない。ヤツがすぐ傍にいる」

と、立ち上がると落ち着かない様子で猟銃を手に周囲を探索する。

獣の気配はない。

大楠「（山林に向かって）いつでも来い！

返り討ちにしてやる！」

と、大楠の声がこだまする。

○小料理屋『みゆき』・外観

『仕込み中』という下げ札が掛かる。

○同・中

大楠、カウンターの端で寝息を立てる。
割烹着姿の加我深雪（43）、椅子の背
に掛かった上着を手に取り、大楠に掛け
てやる。

大楠の隣に座り、大楠の寝顔を見詰める
深雪。

深雪、大楠の頬を指でつつく。

大楠、薄っすらと目を開け、深雪の顔が
傍にあるのを見て、

大楠「うわっ！」

と、椅子から転げ落ちる。

大楠「お、脅かすなよ。びっくりするだろ！」

深雪「ごめん、ごめん」

と、大楠の驚きように声を殺し笑う。

× × ×

厨房で小気味よい包丁の音を響かせる深
雪。

大楠、カウンターで茶を啜る。

深雪「緒音ね、今夜塾の合宿で泊りなの」

大楠「そうか、今どきの高校生は大変だな」

深雪「ねえ、今夜ウチでご飯食べていけば？」

何も用意してないんでしょ？」

大楠「ああ、じゃあそうっすかな」

と、茶を飲む。

深雪「なんなら泊っていく？」

大楠、茶をふき、咽ぶ。

深雪「あらあら、はいこれ」

と、台布巾を大楠に手渡す。

大楠「（カウンター台を吹きながら）そ、そ

ういうのは冗談でも良くないぞ」

深雪「そうね……」

と、カウンターを拭く大楠を寂し気に見
詰める。

○町中・商店『スガバシ』・外観

大楠のスクーターが停まっている。

○同・中

大楠、ドッグフードが並ぶ棚を見て歩く。

大楠 「（低脂肪と謳ったドッグフードを手に取り）イヌのヤツ、最近太ってきたからな。こういうのにするか」

と、買い物かごにドッグフードを入れる。
自分の背丈より高い棚のバスケットに懸命に手を伸ばす女兒（4）。
僅かに手が届かない。

大楠、バスケットを掴み、

大楠 「ほれ」

と、女兒に手渡す。

女兒 「おじちゃん、ありがとう」

と、満面の笑みを浮かべる。

大楠 「（目を見開き）千紗子……」

と、女兒をジッと見つめる。

女兒、不思議そうに大楠を見る。

母親の声 「サキ、そこにいたの。ほら、行く

よ」

女兒 「待って、ママ！」

と、走り去っていく

× × ×

レジカウウンターの氷橋（35）、二人連れの女性外国人旅行者相手に、

氷橋「バーイ」

二人連れの女性外国人が店を出ていくのを手を振りながら満面の笑顔で見送る。

大楠、レジカウウンターに商品が入ったかごを音を立てて置き、

大楠「鼻の下なんか伸ばしてお前気持ち悪いぞ」

氷橋「そうっすか？ でも、いいな。金髪美女は」

と、恍惚の表情を浮かべる。

大楠「しかし、最近やたら増えたな。ああいうのが。一体、こんな何もない田舎に何の用があるってんだ」

氷橋「知らないっすか？」

大楠「何が？」

氷橋「マタマタマガチチャンネル」

と、スマホを取り出し、動画投稿サイトを再生する。

画面には『マタマタギチャンネル』

と題し、木俣がマタギの生活を紹介する
動画が流れる。

氷橋「今、木俣さんがやってるマタギの生活を
紹介した動画が外国人にバズってて。マ
タギの生活を実際にこの目で見ようと、こ
の町を訪れる外国人が増えてるんですよ」

大楠「何だそれ、くだらん」

氷橋「くだらないっすよ。この町を訪れ
る外国人旅行者のおかげで店の売り上げも
上がったし、マタマタギチャンネル様
ですよ」

大楠「いいから早く会計しろ！」

氷橋、レジを打ちながら、

氷橋「そう言えば最近、畔木さんとこの牛が
クマにやられたらしくて。他にもこの辺で
クマの目撃が相次いでるし」

と、大楠の顔を窺いみる。

氷橋「だからクマ退治をその…… 大楠さん
に頼めないかって皆が……」

大楠「いくらだ？」

氷橋「えっ？」

大楠「勘定だよ」

氷橋「あ、2100円です」

大楠、金をレジカウンターに置くと、

大楠「じゃあな」

と、商品の入ったレジ袋を手に取り、店を出ていく。

氷橋「あ、ちよっと…… ったく」

と、顔を顰める。

○畔木牧場（夕）

大楠、腰を下ろし、牧草地に残るクマの足跡（幅10センチ）を手でなぞる。

大楠「違ったか……」

大楠の傍に立ち、様子見の畔木（63）。

大楠、立ち上がり、

大楠「悪いが他のヤツに頼んでくれ」

畔木「あ、おい！ 他のヤツって？」

大楠「さあな。木俣なら喜んでやってくれる

よ」

畔木「そんな殺生な」

立ち去っていく大楠。

○公園・前道路（夜）

長一郎、大楠が持つリードを引っ張りながら進む。

大楠「おい、イヌ！ そんな生き急ぐな」

長一郎、地面に鼻を近づけながら大楠を引っ張って行く。

○同・入口（夜）

長一郎、立ち止まり、公園の方を窺う。

大楠「どうした？ イヌ」

長一郎、『ワン！』と吠えと、大楠を引っ張り公園の中へ走り出す。

○同・中（夜）

三人の屈強な男性外国人に取り囲まれる
緒音。

男性外国人1「オジョウチャン、カワイイネ。

ボクタチトアソビマシヨウヨ」

と、緒音の腕を掴む。

緒音「放してよ！」

男性外国人1「イイジャナイデスカ？ ワル

イヨウニハシナイカラ」

緒音「いやっ！」

と、男性外国人1の頬を平手打ち。

男性外国人1、頬を押さえ、緒音を睨む。

緒音「な、何よ？」

と、後ずさる緒音の背後から男性外国人

2と3が取り押さえる。

男性外国人1「ゲンキナノモイイケド、アン

マリチヨウシノルトイタイメミルヨ」

と、懷から飛び出しナイフを出す。

長一郎、駆けて来て男性外国人1の足に

噛みつく。

男性外国人1「アウチッ！」

男性外国人1、長一郎を振り払おうとす

るが、噛みついたまま離れない長一郎。

大楠、息を切らしながら追いつき、

大楠「イヌ、急に走るな。こっちは追いかけるのが」

と、緒音を取り押さえる男性外国人2と3を見回す。

大楠「何だ、お前ら？ 緒音、こいつらと知り合いか？」

緒音、首を横に強く振る。

大楠「その子から離れろ」

と、男性外国人2と3に詰め寄る。

男性外国人1「ニホンジンガ！」

と、大楠の背後からナイフで切りかかる。

大楠、男性外国人1の顔に肘鉄を一撃。

地面に卒倒する男性外国人1。

男性外国人2と3、大楠に飛び掛かる。

× × ×

地面に蹲る三人の男性外国人。

長一郎、緒音に飛び掛かると、緒音の顔を舐めまわす。

緒音「（笑顔で）助けてくれてありがとね、

長ちゃん。でも、相変わらずお口が臭いよ」

大楠「イヌ、よくやった！ イヌにしてはお手柄だぞ」

緒音「またイヌなんて呼んで。長ちゃんには私がつけてあげた『長一郎』っていうちゃんとした名前があるんだから。長ちゃんも名前で呼んで欲しいよね？」

『ワン！』と返事をする長一郎。

大楠「それにしても夜道を一人で歩くなんて物騒だぞ。俺たちが偶然通りかかったから良かったものの。一体何やってたんだ？」

緒音「塾の帰りで遅くなったんだもん」

大楠「そうか。学生も大変だな」

緒音「いたっ」

と、右足首を押さえその場にしゃがむ。

大楠「おい、大丈夫か？」

緒音「アイツらのせいで足捻ったみたい」

大楠「一人で歩けるか？」

緒音、首を横に振る。

大楠「仕方ない、ほら」

と、緒音に背中を向けしやがむ。

○道（夜）

大楠、緒音を背負い歩く。

長一郎は大楠の横にしかりとつく。

緒音「清の背中、広くて大きい。何だか小さい頃を思い出す」

大楠「小さい頃？」

緒音「私ね、子供の頃よくこうして死んだパパにおんぶしてもらってたの」

と、大楠の背中に顔をつける。

大楠「そうか」

緒音「私、『パパ清』ウェルカムだから」

大楠「な、何だ急に?!」

緒音「清も知ってるでしょ、ママの気持ち」。

清はどうなの？」

大楠「どうってお前……」

緒音「ママのこと嫌い？」

大楠「そんなわけ、寧ろ……」

緒音「だったら清からママに気持ち伝えてあ

げてよ。きっとママも清の言葉待ってる」

大楠「そんな単純には行かねえんだよ」

緒音「何それ？！ 逃げる気？ 清、男らしくないぞ」

大楠「あー、その話はもうおしまいだ！」

緒音「ホントどうしようもないね。長ちゃんもそう思うでしょ？」

長一郎、『ワン！』と鳴く。

大楠「うるさいぞ、イヌ！」

緒音「またイヌなんて呼ぶ」

長一郎、不貞腐れた鳴き声を上げる。

○商店街

大楠、スクーターで時計店の前を通りかかる。

店主（60）、割れたショウウィンドウのガラスを箒でかき集めている。

大楠、スクーターを停め、

大楠「どうした？」

店主「昨晚、外国人同士が酒に酔って店の前

で喧嘩始めてね。そのとばっちりだよ」

大楠「それは災難だったな」

店主、通りを見渡す。

自販機のゴミ箱からは空のペットボトルや空き缶が溢れかえっている。

店主「最近この通りもゴミが増えたよ。観光客が置いてった空き缶だの、カップ麺の容器だの、掃除が大変だ」

と、再び掃き出す。

店主「他所から人が来て町が賑わうのは良いが、治安は悪くなる一方だ。静かな暮らしはもう望めないよ」

大楠、掃き掃除をする店主の背中をジッと見つめる。

○小料理屋『みゆき』・中（夜）

カウンターに立つ深雪。

カウンターの端で一人呑む大楠。

少し離れたカウンター席で小田部と木俣が呑んでいる。

木俣「女将さんね。今日俺、こんなにでつかいヒグマを仕留めたんだぜ」

と、両手を広げ大きさを表現する。

深雪「へえ、それは凄いわね」

木俣「そうだ、仕留めた時の動画があんだ。

見るか？」

と、スマホを取り出し、深雪に動画を見せる。

深雪「これってもしかして？」

木俣「ああ、畔木の親父の牛を襲ったクマだ。畔木の親父に頼まれてな。脳天に一発撃ち込んでやったよ。近々ネットにアップするからさ、女将さんも『イイね』よろしくね」

深雪「分かったわ。でも、木俣さんのチャンネル今凄い人気なんでしょ？ 特に外国の人にウケてるって」

木俣「そうなの。最初は地味なマタギの仕事を皆に知ってほしくて始めたんだけどね。これが思いのほかウケちゃって。これからマタギの姿を体現してんだ、俺は」

大楠「けっ、笑わせるぜ」

木俣「何だよ、その言い草は？！」

大楠「何がこれからのマタギだ。周りからちよつとチャホヤされたからって浮足立ちやがつて」

木俣「何を？！」

大楠「ウケるとかウケねえとか、てめえはそんなちんけな価値観で命を奪ってんのか？！
命と向き合う時はな、ちゃんと地に足つけてねえとダメなんだ。おめえにマタギを名乗る資格はねえ！」

木俣「え、偉そうに言うな！ 何十年もクマ撃ちにも出てねえヤツがよ。今回だって畔木の親父の頼みを断ったらしいじゃねえか、あんたこそマタギって言えんのか？！」

小田部「おい、もうその辺にしとけ」

と、木俣を宥める。

木俣「死んだ金造の爺さんに聞いたぞ。あんた、山のヌシを目の前にした時何も出来なかったらしいな。腰抜け」

大楠、カウンターを叩き、立ち上がると、
木俣を睨みつける。

大楠の鋭い眼光を見て怯む小田部。

木俣「な、何だ？ やるか、この野郎！ 大
体、ドローンだってまだ弁償してもらって
ねえんだからな」

と、身構える。

深雪「キヨさん、駄目よ」

大楠「勘定だ、勘定にしてくれ！」

深雪「は、はい」

大楠、勘定を済ますと店を出ていく。

○同・外（夜）

大楠、暖簾を搔き分け、店から出てくる。
雪が舞い始める。

大楠「初雪か…… 冷えるな」

と、背中を丸め歩き出す。

深雪の声「キヨさん、待って！」

と、大楠に駆け寄る。

深雪「少し痩せたんじゃない？ ちゃんと食

べてるの？」

と、大楠の上着の襟を直す。

大楠「食べてるよ。それより深雪、あのな」

深雪「（大楠の襟元から視線を上げ）何？」

大楠「あ、いや。やっぱりまた今度にするわ」

深雪「あら、そう」

大楠「さっきはすまなかったな」

深雪「（首を横に振り）他のお客さん同士で

もよくあることだから、ああいうこと」

大楠「そうか。じゃあな」

と、再び歩き出す。

深雪「また、緒音に何か持たせるわ」

大楠、右手を軽く上げ振り返らずに去っ

ていく。

○同・中（夜）

店内はカウンターの小田部と木俣の二人だけ。

小田部、熱燗を飲み干し、

小田部「あいつにとってクマは特別だ。お前

も『ゴロ』は知ってるだろ？」

木俣「ああ、山のヌシと恐れられた巨大熊だろ？　実際に見たことはねえけど」

小田部「大楠には4歳になる娘がいたが、ゴロに食い殺されちゃった。それ以来、大楠はゴロにすっかり憑りつかれちゃってる。毎日山に入ってはヤツの痕跡を追い続けてよ、アイツが狙うのはゴロだけだ」

木俣「そうだったのか。でも、金造爺さんに右目潰されてからゴロを見たヤツは誰もいねえんだろ？　とつくにくたばっちゃってるよ。あんたもそう思うだろ？」

小田部「ああ。だが大楠だけはゴロがまだ生きてると信じて復讐の機会を窺ってる」

木俣「呆れたね」

小田部「女房もそんな大楠に愛想を尽かし、出て行っちゃった」

木俣「益々惨めだねえ」

小田部「お前も知っての通り初めて大楠に復讐の機会が訪れたのは脱サラして金造爺さ

んに弟子入りした直後だ。しかし、ヤツは
ゴロを前に何も出来なかった」

木俣「へっ、所詮腰抜けよ」

小田部「当時のあいつはな。だが、あいつは
自分の無力さをその時痛いほど知ったはず
だ。そういうヤツはとことん強くなるか、
それとも駄目になるかのどっちかだ」

木俣「あいつは後者だね」

小田部「さっきのあいつの目。あれは本物の
マタギの目だった。今のあいつならひよっ
として」

木俣「買いかぶりすぎだよ。折角の酒がまず
くなっちゃった。飲み直しだ、飲み直し」
と、コップの酒を飲み干す。

○温泉施設・外観

雪景色が広がる。

○同・露天風呂

大楠と小田部、並んで湯に浸かっている。

小田部「あー、骨の髄までしみてくらあ」

と、一杯に手足を伸ばす。

小田部「（大楠を横目で見て）お前さん、もう一度所帯を持つ気はねえのか？」

大楠「何だ、急に？」

小田部「もういいだろ。そろそろ自分の幸せだけを考えろ。深雪の気持ちにいい加減応えてやれ」

大楠「あんたまで」

小田部「え？」

大楠「緒音にも言われたよ。だが、俺には深雪たちを幸せには出来ねえ」

と、首を横に振る。

小田部「お前さんは相変わらず何も分かっちゃいねえな。このたくらんけ（馬鹿者の意味）」

大楠「何だと？！」

小田部「おめえが二人に幸せにしてもらうんだよ。アイツらはお前の過去を知らねえんだ。好都合じゃねえか。お前がゴロのこと

を忘れさえすれば」

大楠 「そんなこと出来るかつ！」

と、立ち上がる。

小田部 「まあ、落ち着け。お前が娘の復讐の為にゴロに拘るのはよく分かるが、ゴロだつてもう生きてるとは限らねえぞ。現にここ何年も」

大楠 「ヤツはきっと生きてる！　じゃなかったら俺が此処まで生きてきた意味がねえ。ヤツをやれるなら命だって惜しかねえんだ。未来がどうかそんな俺には関係ねえよ。いつそヤツと共倒れに」

小田部 「馬鹿野郎！　死んだ娘さんがそれ聞いて喜ぶか？　いい加減自分の幸せの為に生きろ。それが一番の弔いだ。娘さんだつてお前さんの幸せを願ってるはずだ」

大楠、俯き拳を強く握りしめ、

大楠 「もう出る！」

と、湯船から出て行く。

小田部 「どうしようもないくらんだ」

と、呆れ気味に首を振る。

○大楠宅・寝室（夜）

布団が轢かれた室内。

枕元には水の入ったコップと『睡眠薬』の紙箱。

寝間着姿の大楠、仏壇の前で、

大楠「千紗子、このまま俺だけが幸せになるわけにはいかねえよな」

と、千紗子の遺影を一瞥。

大楠「分かってる。もうすぐだからな。必ずこの手で仇をとってやる、待っててくれ」と、リンを鳴らし手を合わせる。

○山の麓

大楠、猟銃を肩にかけ斜面を下っていく。

大楠「結局今日もヤツを拝めず仕舞いか」

『ワン、ワン！』というけたたましく犬の鳴き声が聞こえてくる。

大楠「長一郎？」

緒音の声「助けて！」

大楠、慌てて斜面を駆け下りていく。

○大楠宅・裏庭

鈍色の空。

太陽を隠す厚い雲。

雪の上に魚の煮付けとタッパーが散乱している。その近くに血痕。

傍で右腕を押さえ蹲る緒音。

緒音の右腕から血が滴り落ちる。

仁王立ちで緒音を見下ろす右目が潰れた
二メートル以上ある一頭の高グマ。『ゴ
ロ』だ。

長一郎、ゴロに向かって吠え続ける。

ゴロ、緒音に襲い掛かる。

緒音、目を閉じ、縮こまる。

聞いた銃声が轟く。

緒音、目を開けると、猟銃を構える大楠
が立っている。銃口からは硝煙が立ち昇
る。

大楠「これ以上は奪わせねえぞ」

ゴロ、銃声に驚き、雑木林へ駆け去る。

大楠、緒音に駆け寄り、

大楠「大丈夫か？！」

顔を歪める緒音。

大楠「（緒音の腕を掴み）傷は深くない」

と、腰の手拭いを歯で引き裂くと、傷を

負った緒音の右腕をきつく縛る。

さらに緒音の顔が歪む。

大楠「一人で歩けるか？」

緒音、頷く。

大楠「よし。近くの民家に助けを呼んで、病院に連れて行ってもらえ。いいな？」

緒音「分かった」

緒音、駆け出す大楠の右腕の袖を掴み、

緒音「ママと一緒に待ってるから。ちゃんと

戻って来てよ」

大楠「ああ」

緒音「（目に涙を溜め）絶対だよ」

と、大楠の袖を掴む手に力が籠る。

大楠 「緒音……」

と、涙ぐむ緒音をジッと見つめる。

大楠 「分かった。必ず戻ってくる。だから深雪と二人で待っていてくれ」

と、親指の腹で緒音の涙を拭うと、雑木林へ駆け出していく。

○雑木林

大楠、雪深い中をゴロの足跡を追って進む。

足跡が続く先に茂みが見える

大楠、猟銃を構え、茂みに近づいていく。

茂みから『ゴソッ』という物音。

素早く茂みに銃口を向ける大楠。

茂みから一匹のエゾリスが飛び出し、大楠の股の間を駆け抜ける。

エゾリスは向かいの茂みの中へと姿を消す。

大楠 「（猟銃をおろし）脅かしやがって」

大楠、足跡の傍に腰を下ろす。

足跡は茂みの直前で後ろに踏み直されて
いる。

大楠 「（ハツとし）しまった、戻り足だ」

と、後ろを振り返った大楠にゴロが飛び
掛かる。

大楠、雪原に覆い倒される。

ゴロ、牙をむき出し、倒れ込む大楠に何
度も噛みつくようにする。

大楠 「くそっ、後ろの茂みに潜んでやがった
か！」

と、猟銃を盾に応戦する。

ゴロの涎が大楠の顔を汚す。

大楠、ゴロの顔面を右手で何度も殴打す
る。

ゴロ、大楠の右手に噛みつく、大楠の
右手の薬指と小指の第二関節から先を喰
いちぎる。

大楠、堪らず呻吟する。

大楠、ゴロと格闘しながら雪原を転がり
ゴロと共に崖から落下していく。

○民家・庭先

緒音、近隣女性（４８）に付き添われ、
停車中の車に向かう。

緒音、立ち止まり後ろの山を振り返る。

緒音「（不安そうに）清……」

近隣女性「ほら、何してるの？ 早く乗って」
緒音、車に乗り込む。

○雑木林・崖下

うつ伏せで動かないゴロ。

折れ曲がった左足を引きずりながら近く
の木の傍まで這っていく大楠。

大楠、木に凭れかかると腰の手拭いを血
だらけの右手に巻き付け、

大楠「畜生っ！！」

ゴロの身体が微かに動く。

大楠、慌ててゴロと自分の間に転がる猟
銃に這って行く。

大楠の左手が猟銃を掴んだ瞬間、ゴロの
右前足が大楠の背中を踏みつける。

右前足の爪が大楠の背中に大きく食い込む。

大楠、呻き声を上げる。

ゴロ、さらに大楠の首筋に噛みつく。

大楠、呻き声を上げ、動かなくなる。

ゴロ、大楠の身体を前足で小突く。

大楠「……」

と、うつ伏せのまま反応がない。

大楠、体を反転させると、

大楠「俺はまだ死ぬわけにはいかねえんだ！

この20年すべて犠牲にしてお前に復讐する為に生きてきたんだからな！」

と、ゴロの首筋にナガサを数回突き刺す。

ゴロ、咆哮すると、右前足で大楠の左頬を薙ぎ払う。

ボロ衣みたく雪原を転がっていく大楠。

大楠、裂けた左頬を押さえ雪原をのたうち回る。

大楠、雪原にうつ伏せで、

大楠「くそつたれ……とことんコケにしや

がつて。このままで終われるかよ」

と、雪を握りしめる。

大楠、傍に落ちている猟銃が目に残り、

大楠「俺は……」

と、血で真っ赤になった齒を食いしばって猟銃に手を伸ばし掴む。

大楠、起き上がり片膝立ちで猟銃を構える。

大楠「お前をやらねえことには、これ以上先には進めねえんだ！！」

ゴロ、大楠に向かってくる。

大楠「来やがれ、バケモノ！」

と、ボルトハンドルをスライドさせるとゴロに狙いを定める。

○山中・中腹・杉林

木俣、右手に自撮り棒、左手に野兎を持ち、

木俣「（スマホに向かって）ウサギ、ゲットしました！」

と、野兎をスマホの前に掲げる。

木俣「ということで、今回は冬のウサギ狩りを紹介しました。本日はここまでになります。高評価、チャンネル登録、イイねも宜しくお願い！ それでは次回の動画でお会いしましょう。マタマタギチャンネルでした」と、スマホを下ろす。

木俣「よし、帰って編集だ」

と、左手の野兎を脇に投げ捨てる。

と、銃声が轟く。

続けさまに二発目の銃声。

木俣「（怪訝な表情を浮かべ）麓の方からだ」と、猟銃を肩にかけ駆け出す。

○雑木林・崖下

大楠の声「（消え入りそうな声で）ショウブ、ショウブ……」

動かなくなったゴロの下敷きになる大楠。

大楠の下雪が血で赤く染まる。

厚い雲が忙しなく流れていく。

大楠 「（右手を空に向かって伸ばし）千紗：
子……」

と、雪原に力なく大楠の右手が落ちる。

○雑木林

木俣、雪原に出来た熊の足跡を追いながら進む。

木俣 「しかし、随分デカいな。ひょっとして
と、点々と続く血痕を目で追う。
遠くに大きな黒い塊が見える。

× × ×

木俣、血だまりの中うつ伏せで絶命する
ゴロの死体を見て、

木俣 「ゴロ?!」

木俣、ハッとし、

木俣 「そうだ。カメラ、カメラ」

と、スマホのカメラで撮影し出す。

木俣 「（ゴロの身体を触りながら）しかし、
近くで見るとデカさに驚くぜ。噂には聞いてたが、ここまでとは」

と、スマホ片手にゴロの臀部から頭部へと回る。

木俣、ゴロの下敷きになり、目を瞑る大楠に、

木俣「うわっ！」

と、驚きスマホを雪の中に落とす。

木俣「し、死んでんのか？」

と、スマホを手に恐る恐る大楠に近づく。

木俣「（スマホで撮影しながら）お、おい」

と、大楠の肩を右足で小突く。

大楠の死に顔は穏やかだ。

木俣「本当に死んで……」

と、大楠、木俣の右足を鷲掴みする。

大楠「（目を開け）いてえよ」

木俣「うわっ！ い、生きてる」

と、驚いて腰を抜かす。

大楠「生きてちゃ悪いのか？」

木俣、へたり込んだまま首を横に振る。

大楠「これ、どけてくれ。苦しくてしょうがねえ。このままだと本当に死んじゃう」

木俣「あ、ああ」

と、立ち上がり、ゴロの死体に近づく。

木俣「これ、あんたが？」

大楠「そうだ」

木俣、生唾を飲み込むと、ゴロの死体に
手をかける。

持ち上げようとするが持ち上がらない。

木俣「駄目だ、一人じゃ無理だ。今助けを」

と、スマホを取り出すが電波が入らない。

木俣「ここからじゃ無理か。待っててくれ、

呼んでくるから」

と、駆け出していく。

大楠「早くな！」

大楠、空を見上げ、

大楠「千紗子、父ちゃんまだそっちには暫く
行けそうにねえわ。戻るって約束しちまっ
たんだ。わりいな」

太陽が雲間から顔を出す。

（了）